

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 13 日現在

| |
|--|
| 機関番号：12102 |
| 研究種目：挑戦的萌芽研究 |
| 研究期間：2011～2012 |
| 課題番号：23653314 |
| 研究課題名（和文） 南米ボリビア国の障害児教育における教師教育モデルの構築と展開 |
| 研究課題名（英文） Programs based educational practices in international education cooperation -Case study of Plurinational State of Bolivia- |
| 研究代表者 |
| 安藤 隆男 (ANDO TAKAO) |
| 筑波大学・人間系・教授 |
| 研究者番号：20251861 |

研究成果の概要（和文）：国際協力機構および筑波大学附属特別支援学校 5 校との連携協力のもと、筑波大学特別支援教育研究センターで展開してきた現職教員研修事業と青年海外協力隊派遣現職教員へのサポート事業の実績をいかして、ボリビア国の研修生を対象に教育実践型の本邦研修を実施した。研修生による研修評価をもとに、国際教育協力における教育実践型研修の今後の方向性について検討を試み、研修前後の指導の重要性とフォローアップ体制の構築の必要性を改めて確認した。

研究成果の概要（英文）：A case with the training type of educational practiced style for trainees sent from the Plurinational State of Bolivia is reported in this study. The researchers conducted this training program in cooperation with five special support education schools, the University of Tsukuba, and the Japan International Cooperation Agency (JICA). This program makes use of the performance of the International Cooperation Initiative between April 2011- March 2013, which is a project that the Special Needs Education Research Center at the University of Tsukuba has conducted to support programs for in-service teachers and teachers who are Japan Overseas Cooperation Volunteers for JICA. This study details how the training researchers have examined and discussed the future direction for training of international cooperation in education by referring to the evaluations of trainees and coordinators. The result of our research clearly shows that we need to teach before and after training and construct a support system for improving the quality of training.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|-------|-----------|---------|-----------|
| 交付決定額 | 2,800,000 | 840,000 | 3,640,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：障害者教育・国際教育貢献

1. 研究開始当初の背景

南米ボリビア国では、現政権の強力な指導の下、多様性インクルーシブ教育の構想とこの具現が喫緊の課題とされている。これは、36の民族と4つの公用語を有する同国の多様性を背景に、障害がある人への専門的で、適

切な教育を具現する国家の意志を示すものである。ボリビアは、アクションプランの策定等に、わが国の特別支援教育に関わる学術および実践研究の成果に大きな関心を寄せている。筑波大学特別支援教育研究センターは、現職教員研修事業を主たる事業として位

置づけ、学内の「科学の知」と「実践の知」を活用した現職教員研修プログラムの作成と実践を展開しており、海外からの現職教員の受け入れの実績を積みつつ、研修プログラム構築に着手し始めたところである。このような実績に基づき、同センターは、国際協力機構（JICA）からボリビア国の障害児教育の教師教育に関わるプログラム作成からアクションプランへの展開、その評価に関する一連のシステム構築への協力を要請された。

2. 研究の目的

筑波大学特別支援教育研究センター（以下、センター）で展開している現職教員研修事業および青年海外協力隊派遣現職教員へのサポート事業で培った知見をもとに国際教育協力を資する研修プログラムを構築し、そのプログラムが途上国の特別支援教育の向上にどのような効果をもたらすのかについて、ボリビア多民族国における事例を通して検討し、今後の国際教育協力のあり方についての示唆を得ることを目的とする。

3. 研究の方法

(1)ボリビア国における特別支援教育の現状とニーズの把握：障害児教育の拠点となるニエル・アセンシオ・ビリャロエル高等教員養成機関、シモン・ビリバル高等教員養成機関、エンリケ・フィット教員養成学校の3校が位置するラパス、サンタクルス、コチャバンバの3つの地域を対象として、現地調査を実施した。さらに、JICAの協力を得て、TV会議を用いて本邦研修に参加する研修生のニーズの把握を随時行った。

(2)研修プログラムの構築と実施：現職教員研修事業で蓄積した研修プログラムを基盤として、青年海外協力隊派遣現職教員へのサポート事業および「南米地域（エクアドル・パラグアイ・チリ・ボリビア）への特別支援教育の研修」に関する事業で得た知見も参考に、教育実践型研修プログラムを作成した。ボリビア国の現職教員研修生を対象として教育実践型研修プログラムを実践し、研修生にプログラムの評価を求めた。

なお、研修対象者は、ボリビア多民族国の特別支援教育における中核的人材の育成を目的として展開されている「ボリビア多民族国特別支援教育教員養成プロジェクト」におけるコアグループから選出された20名であった（内訳：新規教員養成学校の教員と特別支援学校パイロット校の教員）。

4. 研究成果

(1)ボリビア国における特別支援教育：ボリビア国においては、特別支援教育に就学すべき子どもの約98%が教育を受けていない状

況にあり、個々の子どものニーズに応じた適切なカリキュラムと施設の準備が不十分であることや、特別支援教育に勤務する教員の70%が普通教育の免許しか保有していないことが報告されており（国際協力機構人間開発部、2010）、特別支援教育を推進していくためには、特別支援教育に関わる知識と実践力をもつ中核的人材の養成が喫緊の課題である。

1932年に実施した視覚障害者のためのリハビリテーション活動が基盤となり、聴覚・視覚障害者団体、幼児リハビリテーション研究所（Infantile Rehabilitation Institute）、ボリビア精神医学協会（Bolivian Psychiatric Society）、ボリビア盲人研究所（Bolivian Institute for Blindness）などが創設され、日本の特別支援教育に相当するような障害種の学校やセンターも設置されている。しかしながら、現地の様々な機関の視察を通して、アセスメントを実施する意義およびその具体的な方法や教材研究の不十分さ、就労にかかる課題が浮き彫りとなった。これらのことから、特別支援教育の体制の整備や具体的な指導法だけではなく、一貫した視点をもって乳幼児から成人までを網羅する教育的支援を展開する意義と必要性に対して理解を深められるような研修プログラムを構築することも重要であると考えた。

(2)教育実践型プログラムの概要：2011年度は視覚障害および聴覚障害、2012年度は運動障害および知的・発達障害を主とする研修プログラムを策定した。いずれの研修プログラムも「①講義（日本の特別支援教育に関わる総論等）」「②教育実践型演習・実習」「③参観・見学」「④研修まとめ」の4つの研修形態から構成される。以下に、その概要を示す。

①講義：日本の特別支援教育・附属学校に関する大学教員による講義（講義例：日本の特別支援教育の制度と教育課程、自立活動と個別の指導計画、アセスメントの意義、授業づくり、教材教具と指導法、附属学校の使命と役割、校内研修等）

②教育実践型演習・実習：附属学校をフィールドとした障害領域別演習・実習（講義例：指導法、自立活動、子どもの実態把握とアセスメント、個別の指導計画、早期教育、移行支援、職業教育、センター的機能、研究授業／研修における到達目標に係るワークショップ（個別の指導計画の作成、授業案作成）

③参観・見学：①講義と②教育実践型演習・実習の理解を深めるための学内外見学（筑波大学教育組織、筑波大学障害学生支援室、筑波技術大学、公立小学校、通所型作業所、職能訓練センター、療育センター等）

④研修まとめ：研修における到達目標に係るワークショップ（個別の指導計画の作成、授業案作成）の成果報告会、全体のまとめ

(3)本邦研修の全体評価：2012年度に研修を受けた10名（運動障害、知的・発達障害を主とする研修）に、「到達目標とニーズに適合性」「研修期間の適切性」「研修に対する期待充足度」「日本への印象」について5段階で回答を求めたところ、評価5～4(satisfied, appropriate, full achieved)の高い評価を得た。表1に「本邦研修における到達目標の達成」に関する評価を示した。研修生は、事前に日本の特別支援教育に関する研修も受けていたが、本邦における具体的な教育実践を体感することにより、理解が進んだことがうかがえ、自由記述には、研修で学んだ内容をボリビア国に適したスタイルに改善を試みたいという積極的な記載もみられた。

表2に研修成果の活用の可能性について回答を示した。「短期的に実現可能な内容」として「ホームルームの設置」「学級構成」などが挙げられ、学校および学級運営に関わる内容であった。一方「実現に向けて長期的に努力すべき内容」としては「個人やグループのニーズに応じた授業および指導」「身近にある材料を活用した教材作成」などであり、障害児教育に関わる専門性や指導の技量に関わる内容が多くを占めていた。

表1 到達目標の達成に関する評価（人数）

| 到達目標 | | 評価5 | 評価4 | 評価3 | 評価2 | 評価1 |
|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 目標1 | 研修前 | 2 | 4 | 3 | 1 | 0 |
| | 研修後 | 6 | 4 | 0 | 0 | 0 |
| 目標2 | 研修前 | 2 | 2 | 4 | 1 | 0 |
| | 研修後 | 7 | 2 | 0 | 0 | 0 |

*評価5 (full achieved) ～評価1 (unachived)

**目標1：日本における特別支援教育の理解

***目標2：自国の教育実践能力向上への改善案の作成

表2 研修成果の活用の可能性（主な回答）

| | |
|---------------------------|---|
| 短期的に 実現可能な内容 | 授業案作成・個別の指導計画 授業研究・学級編成 |
| 実現に向けて 長期的に 努力すべき内容 | アセスメント・個別の指導計画 個のニーズに応じた指導計画 グループに応じた指導計画 教材作成・教材およびツールの活用 |

(4)教育実践型演習・実習の評価：筑波大学附属特別支援学校および特別支援教育研究センターを教育実践の場として活用した「教育実践型演習・実習」の評価について検討した。「ボリビア国にとって有益であった研修内容」は、「自立活動」「教材教具」「社会的自立と作業場」「個別の指導計画」「グループ

学習」「アセスメント・子どもの活動評価」「授業案」など多岐にわたっていた。

次に、「より深く学びたい研修内容」について表3に示した。回答は教科にかかる指導からアセスメント、障害特性に応じた指導法等と多岐にわたっていたが、「有益であった研修内容」に比べると「より深く学びたい研修内容」の方がより具体的な内容が挙げられていた。「ダウン症」「自閉症」「PEP-3」「DSM-IV」などの具体的な記載や、「授業案」に関しても「多様な障害に対応した授業案」「授業案と個別の指導計画との関係」「授業案作成における理論と実践との関係」など研究授業や授業案作成の実習で生じた疑問にかかるような内容が挙げられていた。また、附属特別支援学校と、特別支援教育研究センターでの演習・実習の両項目において、「多様な障害に対応した授業案」「重複障害児への指導」へのニーズが複数の回答者から挙げられていた。自国で担当している子どもの多くが重複障害児であり、その指導を想定して研修に取り組んでいたためと推察される。

表3 教育実践型演習・実習において深く学びたい内容

| 研修形態 | 回答内容 |
|------------------------------------|-------------------------|
| 筑波大学 附属特別支援学校の 演習・実習 | 数学の授業 (3)・学級運営 (3) |
| | 職業訓練, 職業教育 (2) |
| | 重複障害児の指導 (2) |
| | DSM-IV (1)・音楽療法の技法 (1) |
| | CIPP 評価モデル (1)・早期介入 (1) |
| | 授業研究 (1)・ケーススタディ (1) |
| | 専門用語の臨床的根拠 (1) |
| | 運動障害への適切な物理的支援 (1) |
| | チームティーチング (1) |
| | チームティーチングの規準 (1) |
| 筑波大学 特別支援教育研究 センターの 演習・実習 | 個のニーズに応じた授業実践 (1) |
| | 個別の指導計画 (1) |
| | 個別の指導計画と授業案の関係 (1) |
| | 自立活動 (1) |
| | 知的障害児の体育 (1) |
| | 理科の授業 (1) |
| | 多様な障害に対応した授業案 (5) |
| | 自閉症児の指導法 (3) |
| | ダウン症児の指導法 (1) |
| | 個別の指導計画 (1) |
| 教材作成 (1)・自立活動 (1) | |
| コミュニケーションの発達と指導法 (1) | |
| 授業案作成の理論と実践の関係 (1) | |

*括弧内の数値は回答者数を示す

(5)教育実践を基盤とした国際教育協力の可能性：本研究においては、教育実践を基盤と

して、より実践的に発展させた研修プログラムを活用した国際教育協力を試み、今後の展開に向けて、以下のような示唆を得た。

①事前研修・事後研修体制の構築と充実：研修生の派遣側および受入側ともに、時間的かつ経済的な制約が伴う。限られた時間の中で、研修プログラムを有効的かつ効率的に運用していくためには、事前および事後の指導の実施体制を視野にいれることが不可欠である。特に、息の長い支援協力を目指して、研修後のフォローアップ体制をどのように構築できるのかは成功への鍵となるであろう。また、フォローアップ体制の構築の視点として、派遣された研修生の個人の経験を自国でより広く伝達する方策を構築することも踏まえるべきである。

②言語の差異と文化および歴史的背景に対する配慮と工夫：研修派遣先の国の情勢や方針も踏まえて、情報を提供することも必要である。また、研究授業においても、体育や音楽などの言語の差異の影響が少ないと考えられる教科や指導内容を選定することも重要である。

③国際教育協力を展開する受入側のメリット：日本の教育現場で蓄積されてきた財産を異文化の目で改めて評価される機会を得ることで、日本の教育の更なる発展が促進されると考える。

④研修プログラムの内容の選定：研修生のニーズとして挙げられた内容であっても研修プログラムの構成に組み込めないものも少なくなく、個々の研修ニーズをどのように焦点化していくのかについての検討も不可欠である。また、インクルーシブ教育や重複障害児への指導などのニーズも少なくないことから、研修プログラムにどのような内容で位置づけていくことができるのかについての継続的な検討も必要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

(1) 左藤敦子、池田彩乃、安藤隆男、四日市章、藤原義博、長崎勤、間々田和彦、日高雄之、吉沢祥子、佐藤孝二、野村勝彦、沼澤聡子、国際教育協力事業における教育実践を基盤とした研修プログラムの構築-ボリビア多民族国研修生を対象とした事例を通して-、障害科学研究、査読有、第37巻、2013、65-76

(2) 野村勝彦、安藤隆男、四日市章、藤原義博、長崎勤、左藤敦子、間々田和彦、日高雄之、吉沢祥子、沼澤聡子、ボリビア国研修生に対する実践型研修の試み-附属大塚特別支援学校における模擬授業を例として-、筑波

大学特別支援教育研究、第7巻、2013 (印刷中)

[学会発表] (計2件)

(1) 野村勝彦、間々田和彦、左藤敦子、四日市章、安藤隆男、南米における特別支援教育に関する研究 その2：南米ボリビア国の知的障害児への教育について、日本特殊教育学会第50回大会、2012.9.30、つくばカピオアリーナ

(2) 間々田和彦、野村勝彦、左藤敦子、四日市章、安藤隆男、南米における特別支援教育に関する研究 その3 南米ボリビア国の視覚障害児への教育について、日本特殊教育学会第50回大会、2012.9.28、つくばカピオアリーナ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安藤 隆男 (ANDO TAKAO)
筑波大学・人間系・教授
研究者番号：20251861

(2) 研究分担者

河内 清彦 (KAWAUCHI KIYOHICO)
筑波大学・人間系・教授
研究者番号：50251004
長崎 勤 (NAGASAKI TSUTOMU)
筑波大学・人間系・教授
研究者番号：80172518
藤原 義博 (FUJIWARA YOSHIHIRO)
筑波大学・人間系・教授
研究者番号：10173501
左藤 敦子 (SATO ATSUKO)
筑波大学・人間系・助教
研究者番号：90503699

(3) 連携研究者

川間 健之介 (KAWAMA KENNOSUKE)
筑波大学・人間系・教授
研究者番号：20195142
澤田 晋 (SAWADA SUSUMU)
筑波大学・人間系・教授
研究者番号：30626627
宍戸 和成 (SHISHIDO KAZUSHIGE)
筑波大学・人間系・教授
研究者番号：40332168
宮本 信也 (MIYAMOTO SHINYA)
筑波大学・人間系・教授
研究者番号：60251005

(4) 研究協力者

佐藤 孝二 (SATO KOJI)
筑波大学附属桐が丘特別支援学校・教諭

沼澤 聡子 (NUMAZAWA TOSHIKO)
筑波大学附属久里浜特別支援学校・教諭
野村 勝彦 (NOMURAKATSUHIKO)
筑波大学附属大塚特別支援学校・教諭
日高 雄之 (HIDAKA TAKEYUKI)
筑波大学附属聴覚特別支援学校・教諭
間々田 和彦 (MAMADA KAZUHIKO)
筑波大学附属視覚特別支援学校・教諭
吉沢 祥子 (YOSHIZAWA SACHIKO)
筑波大学附属桐が丘特別支援学校・教諭
上條 貴子 (KAMIJYO TAKAKO)
国際協力機構・現地企画調査員
村田 敏雄 (MURATA TOSHIO)
国際協力機構・国際協力専門員 (教育)